

世界中の映画祭で絶賛!!

第72回 ベルリン国際映画祭 第27回 釜山国際映画祭 第66回 ロンドン映画祭 第56回 カロヴィン・ヴァリ国際映画祭
 第11回 パーゼル・ビルトラウシュ映画祭 第22回 ニッポン・コネクション 第51回 ニューディレクターズ/ニューフィルムズ 第22回 ギムリ映画祭
 第51回 モントリオール・ニュー・シネマ国際映画祭 第37回 バレンシア国際映画祭 Cinema Jove 第21回 ダラスアジア映画祭
 第22回 エラ・ノヴェ・ホリゾンテ映画祭 第23回 フェノスアイレス国際インディペンデント映画祭



目を澄ませて

逃げ出したい、でも諦めたくない

愛想笑いが嫌いで嘘のつけないケイコ
 耳が聞こえない彼女の心は「雑音」だらけ

岸井ゆきの
 三浦誠己 松浦慎一郎 佐藤緋美
 中原ナナ 足立智充 清水優 丈太郎 安光隆太郎
 渡辺真起子 中村優子
 中島ひろ子 仙道敦子 / 三浦友和

監督：三宅唱
 原案：小笠原恵子「負けないで!」(創出版) 脚本：三宅唱 酒井雅秋
 製作：狩野隆也 五老剛 小西啓介 古賀俊輔 エグゼクティブプロデューサー：松岡雄希 飯田雅裕 栗原忠慶 企画・プロデュース：長谷川晴彦
 チーフプロデューサー：福嶋更一郎 プロデューサー：加藤優 神保友香 杉本健介 城内政芳 French Coproducer: Masa Sawada
 撮影：月永雄太 照明：藤井勇 録音：川井崇満 美術：井上心平 装飾：渡辺大智 衣裳：篠原奈美 ヘアメイク：望月志穂美 遠山直美
 ボクシング指導：松浦慎一郎 手話指導：堀康子 南瑞穂 手話監修：越智大輔 編集：大川景子 音響効果：大塚智子 助監督：松尾崇 制作担当：大川哲史
 製作：「ケイコ 目を澄ませて」製作委員会 (メーテレ 朝日新聞社 ハピネットファントム・スタジオ ザファール) 助成：AFF 制作プロダクション：ザファール 配給：ハピネットファントム・スタジオ
 2022年/日本/99分/カラー/ヨーロッパ/5.1ch ©
 この物語は実在の人物や出来事に着想を得たフィクションであり、実在の人物・団体とは一切関わりはありません。
 © 2022 映画「ケイコ 目を澄ませて」製作委員会 / COMME DES CINÉMAS

観る者の心をつかんで離さない、感覚を研ぎ澄ます映画体験。

本作は、聴覚障害と向き合いながら実際にプロボクサーとしてリングに立った小笠原恵子さんをモデルに、彼女の生き方に着想を得て、『きみの鳥はうたえる』の三宅唱が新たに生み出した物語。ゴングの音もセコンドの指示もレフリーの声も聞こえない中、じっと(目を澄ませて)闘うケイコの姿を、秀でた才能を持つ主人公としてではなく、不安や迷い、喜びや情熱など様々な感情の間で揺れ動きながらも一歩ずつ確実に歩みを進める等身大の一人の女性として描き、彼女の心のざわめきを16mmフィルムに焼き付けた。そして本年2月に開催されたベルリン国際映画祭でプレミア上映されるやいなや「すべての瞬間が心に響く」「間違いなく一見の価値あり」と熱い賛辞が次々に贈られ、その後も数多くの国際映画祭での上映が続いている。主人公・ケイコを演じた岸井ゆきのは、厳しいトレーニングを重ねて撮影に臨み、新境地を切り開く。ケイコの実直さを誰よりも認め見守るジムの会長に、日本映画界を牽引する三浦友和。その他、三浦誠己、松浦慎一郎、佐藤緋美、中島ひろ子、仙道敦子など実力派キャストが脇を固める。ケイコの心の迷いやひたむきさ、そして美しさ。全てを内包した彼女の瞳を見つめているうちに、自然と涙が込み上げてくる――。

不安と勇気は背中あわせ。震える足で前に進む、彼女の瞳に映るもの――。

嘘がつけず愛想笑いが苦手のケイコは、生まれつきの聴覚障害で、両耳とも聞こえない。再開発が進む下町の一角にある小さなボクシングジムで日々鍛錬を重ねる彼女は、プロボクサーとしてリングに立ち続ける。母からは「いつまで続けるつもりなの?」と心配され、言葉にできない想いが心の中に溜まっていく。「一度、お休みしたいです」と書きとめた会長宛ての手紙を出せずにいたある日、ジムが閉鎖されることを知り、ケイコの心が動き出す――。

16ミリフィルムから溢れ出す、街を漂う匂い、降り注ぐ光の粒、ケイコの心が軋む音。



12.16 FRI ROADSHOW

ムビチケカード発売中 ¥1,500(税込) ※一部劇場を除く

『ケイコ目を澄ませて』は流れる時間を柔らかにフィルムへと定着させた傑作だ。岸井ゆきのの瞳の輝きと、手と腕の動きとともに渦を巻くような粒子の蠢きを存分に感じるには大画面で見る以外の選択肢はない。

濱口竜介（映画監督）

ボクシングは練習の積み重ね。地味な努力を継続する才能が必要。岸井さんが、ケイコさんが積み重ねた、その日々に泣いた。静かな世界が、こんなに熱く、美しいなんて。間違いなく傑作！

吉田恵輔（映画監督）

1作ごとに驚異的な進化をとげる三宅唱の現時点での最高傑作。

市山尚三（東京国際映画祭プログラムディレクター）

ケイコの一挙手一投足、その表情から目が離せない。

あなたの呼吸、あなたの動きにこの間の中、この光の中で目を澄ましていきたい。

坂本安美（アンステイチュフランセ日本映画プログラム主任）

小さな小さな映画なのに、
とんでもないパンチを胸に打ち込んでくる。
きつと誰かの人生を変えるだろう。

佐久間宣行（テレビプロデューサー）

岸井ゆきのは、拳だ。彼女の貌からは、拳の音が聴こえる。

このフィルムは、蕾だ。握った拳に、花を咲かせる蕾。

拳と蕾のメロウな接近遭遇に、鼓動が鳴りやまない。

相田冬二（Bleu et Rose / 映画批評家）

グローブとミット、拳と空気の共振れは

ダンスの身ぶりのよう。痛覚と愉楽が混在した

その生の闘いは、岸井ゆきのと三宅唱監督の闘いでもある。

後藤岳史（映画ライター）

映画を見るとはこういうことだ。

その単純さ、その尊さに、ぐちゃぐちゃに泣いてしまった。

月永理絵（ライター、編集者）

彼女の（まなざし）は

情熱や葛藤、憤りや哀しみを雄弁に可視化させる。

まるで、かつて映画が無声として始まった歴史に倣いながら、

〈声〉を“想像”“創造”させているかのようだ。

松崎健夫（映画評論家）

純度の高い映画を撮ろう、という澄明な意志の強さに涙が出る。

岸井ゆきのの顔、あるいは肉体に宿った「無」への探究。

我々も目を、そして耳を澄ませます。

森直人（映画評論家）

本能のまま相手に襲い掛かるゆきのの／ケイコの躍動を

三宅唱が持ち前のリズム感で捉え、

エモーショナルなパンチが胸に突き刺さる快作。

矢田部吉彦（映画プロデューサー）

岸井ゆきのが放つ圧倒的熱量に、
心が動かされる。

カルロ・シヤトリアン（ベルリン国際映画祭ディレクター）

※敬称略・順不同

監督：三宅唱 × 岸井ゆきの × 三浦友和

いま、映画人が熱いまなざしを向ける
ケイコの歩みに、心が動き、涙する。

